

民族研究所の構想と「民族研究講座」¹⁾

The Conception of Ethno Institute and Its 'Ethnic Studies Lectures'

中生 勝美

NAKAO Katsumi

1. はじめに

後藤総一郎監修『柳田国男伝』に「戦争と民俗学の周辺」と題する一節がある。「民族学ほど、深く戦争に係わった学問はない」と明確に指摘し、戦争と「民族学」の関係を詳細に記述している(拓植 1988: 891)。また石田英一郎は、「民族学」という名称が、戦後いちじるしく魅力をなくした原因として、「戦争中、民族学者が軍当局にはたらきかけて国立民族研究所を設立させ、従来の日本民族学会をその外郭団体に改組して、この学問をいわゆる大東亜共栄圏の民族政策のために役立てようという姿勢を示したことが、東大の内部をはじめ戦後の知識人の間に、民族学といえは日本は破局に導いた侵略戦争のお先棒をかついだ戦犯の学問だという、拭いがたい印象を残したという事情もあずかっている」と述べて、戦後の民族学に対する批判的な見方の象徴として民族研究所を挙げている(石田 1970: 17)。この民族研究所の設立経緯や組織、活動内容はこれまで明らかにされず、「戦争協力と民族学」と批判された民族研究所について、日本の民族学・人類学の歴史では言及することを避けられ、日本の民族学史をまとめた論文で、簡単に触れられているに過ぎなかった²⁾。筆者は、日本の民族学史を検証する過程で、民族研究所の重要性に気付き、その組織と運営について論文を発表した(中生 1997)。

この論文を発表したのち、ある年配の人類学者から、岡正雄は戦時中にどのようなことをしていたのか尋ねられた。その方は、岡から直接学んだ人だったが、岡の戦前から戦中にかけての活動について、ほとんど知らなかった。筆者が民族研究所の論文を執筆する過程で収集した様々な資料や、当時研究所にかかわっていた人へのインタビューのことを話すと、その研究者は「自分が学んでいるときに、(岡)先生に向かって直接、戦時中は何をしていたのか聞くことははばかれた」と感想を漏らした。まさに、戦争協力の象徴として、前述のように石田英一郎から民族研究所が名指しで批判され、民族学が国策にそった政治的学問という烙印をおされたからこそ、民族研究所は従来の研究史から避けられていたのである。

さらにこの論文を執筆しているとき、民族研究所の組織に、いわゆる研究者ではない人々の「民族研究」を、民族研究所の中でいかに位置づけるかが課題として残された。清水昭俊は、民族研究所が「民族研究」の研究所で、「民族」でも「民族学」の研究所でもない指摘している(清水 2013a: 83)。つまり、「民族研究」が政治学、あるいは地政学的に民族を取り扱うのであり、民族学から乖離した「民族研究」だからこそ、研究者ではない人々が、民族研究所にかかわっていたの

である。

その傾向は、今回翻刻する「民族研究講座」の講師選定に反映している。以前に論文を発表したとき、民族学振興会がこの講座の筆記録を所蔵していることは分かったが、未整理との理由で閲覧できなかった。今回、この筆記録を整理公表することができ、1944年当時、日本ではいかなる世界情勢の分析と民族問題の認識を持っていたのかが明らかにできた。そしてこの「民族研究講座」の構成から読み取れるのは、民族研究所の「民族研究」を、戦争に役立つ「現在の民族学」と位置づけた岡の構想が反映されていることである³⁾。

民族をめぐる地政学、あるいはインテリジェンスとしての地域研究を目指して戦時中に設立された民族研究所は、岡がナチス・ドイツの民俗学・民族研究、および研究体制を参考にした構想に大きく依存している。1933年にナチスが政権を取って以来、ドイツでは民俗学(Volkskunde)が、ドイツの伝統文化の強調とアーリア人の優越性を証明するため、極めて政治的な学問となった⁴⁾。この時代のことについて、岡はほとんど述べていないが、短い紹介文の中に、ドイツの研究事情に詳しい片鱗を見せている。わずかな岡の言説の中に、ナチス親衛隊のシンクタンクが、「疑似科学」のアーリア人起源論に基づき、1935年から38年の間に、学術遠征隊を派遣していた。岡が民族研究所の具体的構想を抱いたのは、ウィーン大学に創設された日本学研究所の所長として赴任した1938年から40年の滞在時期である。ナチス・ドイツの対外膨張政策のマスタープランを「科学的」に証明するため、民族学、古代学、考古学の研究者が動員されていたドイツの状況を、岡は日独文化協議会の日本側委員として知る立場にあった。さらにベルリンの日本大使館と連絡を密にして、中欧・バルカン研究から学んだ地政学やインテリジェンス的な活動の経験により、岡は日本政府に民族研究所の研究目的を説明してきた。そこで本稿では、岡が考えた「民族研究」の構想に影響を与えたと思われるナチス・ドイツの民族研究の概要、そしてインテリジェンス活動についてまとめてみたい。

これらの背景は、本書で翻刻する「民族研究講座」の構成にも関係している。戦時中に、一般市民に民族研究所の活動をアピールし、世界情勢を解説するために企画された「民族研究講座」は、岡が日本政府に対して民族研究所の設置を働きかけた構想の結果として位置づけることができる。

2. 岡正雄の研究所設立構想

民族研究所の創設にあたり、中心的な役割をしたのは、民族学の研究組織に戦前戦後を通じて指導的役割を果たした岡正雄である。岡は1929年から35年にウィーン大学へ留学して学位論文を提出した時期に学んだウィーン学派の学識と、上述のウィーン大学の日本学研究所所長時代の経験が大きく影響している。特に後半の時代は、オーストリアがナチス・ドイツにより併合され、政治的にもきわめて軍事的に緊張した時期だった。岡は、1935年7月末から8月初旬にかけて開催された日本民俗学講習会の第1回大会で、「独塊に於ける民俗学的研究」を発表しており、ウィーン大学留学中に学んだドイツ語圏の民俗学史を簡潔にまとめているが、そこで「人種的社会的民俗学：ナチス民俗学」と題して、ナチス・ドイツの民俗学の研究動向を報告している。

岡がナチス・ドイツの民族研究をモデルに、日本に国立の民族研究所を創設したいと考えるようになったのは、民族研究所設置のために文部省へ提出したドイツの外国語・外国の地域事情を開説した講義一覧などからも見て取れる。清水昭俊は、岡とナチス・ドイツの関係を、第1回のウィーン滞在中では、政権をとったばかりのナチスに影響を感じ取り、第2回のウィーン滞在中でナチス政権の「民族研究」のモデルを学び取ったと指摘する(清水 2013a: 84)。この清水の分析は妥

当である。

岡はナチス民俗学の動向をまとめた論文で、19世紀の民俗学者であるハインリッヒ・リール（Wilhelm Heineich Riehl, 1823-1897）の学説がナチス政権で復興し、民族（Volk）の概念の再検討、ドイツ民族共同態性を研究する現在学を推し進めたことを強調している（岡 1935：367-368）。岡は、この論文でナチス民俗学が完成途上で、まだ理論的整頓に到達していないと結論付けているけれども、1933年にヒットラーが政権を取ってから、国家的文化政策がドイツ民族を積極的に認識しているので、民俗学の社会的地位は大躍進して「時代の寵児」になり、大学の民俗学講座の設置、一般国民の教養学や師範学校の正科、さらに小学校までも民俗学教育が実施されていることを称賛している（岡 1935：366、370-371）。つまり、第1回のウィーン滞在では、理論的な側面よりも、「ドイツの民族性」を強調するナチス政権により民俗学の社会的地位が目覚ましく向上したことに、深い感銘を受けたことを示している。では、民族研究所の構想に、より直接的影響を受けた第2回のウィーン滞在について述べたい。

3. 欧州に於ける民族研究

岡が、1930年代後半のナチス民俗学の進展に対して、いかなる見解を持っていたのか、戦後の回想や対談などから直接言及したものはない。ただ、1941年に発表したわずか3ページの「欧州に於ける民族研究」という岡の紹介文は、ナチス・ドイツにおける民族研究と教育体制に精通していたことを窺わせる。例えば、ビスマルクが3B政策の実施で創設した東洋語学学校の後身である外国語大学と、ナチス・ドイツの時代に新設された政治大学が合体して、ベルリン大学に1940年1月から外国学学部（Auslands wissenschaftliche Fakultät）が再編されたとしている。そのカリキュラムだけでなく、19の研究室で構成され、全世界のあらゆる地域の民族を網羅的に研究対象にしていることを紹介している。また、そのほか20以上の大学で民族研究室・民族研究所・東洋学研究所・スラブ民族諸語研究所が設置されているとしている。この点に関しては、日本で民族研究所を設置するため文部省に提出した文書の中に、ドイツの大学で開講している民族研究に関連する講義のリストや設置された研究所の一覧表があり、これらの書類をもとに紹介文が執筆されたと思われる。

さらに、この文章で興味深いのは、1938年から39年にかけて世界各地に派遣された民族学調査隊の動向である。岡は「ペトリのオーストラリア調査隊、ニグマイヤーのチモール島調査隊、ベルナチックのニューギニア及びタイ北部の調査隊、フェーラー・ハイメンドルフのビルマ・アッサム調査隊（インドにて捕虜）、チベット調査隊（SS所属の学者を以って組織）、シュエヴェスタのコンゴ調査隊、クリックベルクの中米調査隊」をあげている（岡 1941：65-66）。そこで岡が挙げた調査隊について、調べてみた。

最初の「ペトリ」は、ヘルムット・ペトリ（Helmut Petri, 1907-1986）で、1928年から33年までウィーン大学で古代史と形質人類学を学び、1933年に南太平洋の「原始的」経済贈与における通貨の形態で博士号を取得している。その後、ウィーンの民族学博物館と自然史博物館で学芸員となりバルカン半島での調査を始めたが、1935年からフランクフルトの文化形態学研究所（Institut für Kultur-Morphologie）の助手となり、1938年から39年にかけて、フランクフルトの研究所の支援で最初のフィールドワークをオーストラリアでおこなった。彼はキンバリー地区の民族を調査した。戦争が始まる前にデンマークで研究していたが、戦時中はドイツ軍に従軍し、言語能力を利用してフランス・イタリア・ギリシャで軍務につき、終戦時にアメリカ軍の捕虜となった。戦後

はフランクフルトで研究を続けた (Tauchmann 1973 : VI-VII)。オーストラリアの研究は、『死の世界：北東オーストラリア』として出版された (Petri 1954)。

次に、「ニグマイヤー」のチモール島調査隊であるが、これが誰を指すのか、またチモール島への調査隊があったのかは確認できなかった。ニグマイヤーという人物については、軍人のオスカー・リッター・フォン・ニグマイヤー (Oskar Ritter von Niedermayer, 1885-1948) が、その経歴から岡の言及した人物ではないかと思われる。彼は職業軍人であったが、エーランゲン大学で自然科学、地理学、哲学を学び、1912年から軍の経費でベルシャからインドまで、地理学と人類学の調査という名目で旅行し、情報工作に従事していた。1915年から16年に、ニグマイヤー・ヒンティヒ遠征隊 (Niedermayer-Hentig Expedition) を組織してベルシャとアフガニスタンを訪れた⁵⁾。第一次世界大戦後は、ミュンヘン大学で地理学を学び、博士号を取得している。その後軍籍に復帰してモスクワに1924年から31年まで駐在武官として赴任したが、1933年にベルリンのカレッジで講師となり、その後ヒットラーの要請によりベルリン大学の軍事政治研究所 (Institut für allgemeine Wehrlehre) の所長に就任している。第二次世界大戦中は軍籍に戻り、終戦後の1948年に亡くなった (Seidt 1999 : 737-738)。岡が言及する1938年から39年にかけての遠征は、ニグマイヤーがベルリン大学に在籍した時期であるが、詳細なニグマイヤーの伝記にも中東遠征以外の調査はない (Seidt 2002)。別人の可能性もあるが、次に説明するベルナチックがチモールの調査をしているので、岡は混同したのかもしれない。

次に「ベルナチック」は、ヒューゴ・アドルフ・ベルナチック (Hugo Adolf Bernatzik, 1897-1953) である。彼はもともと世界各地を巡る旅行家で、訪問先は次の通りである。モロッコのリフ地方 (1923年)、ルーマニアのジーベンビュルゲンとスペイン (1924年)、エチオピア国境にいたるスーダン (1925年) にエジプトとソマリア、白ナイル川と (旧) ベルギー領コンゴの間の地域 (1927年)、ドブルージャ (ドナウ川下流から黒海にかけての地方) (1928年)、アルバニア (1929年)、ポルトガル領ニューギニアとセネガル (1930-31年)、オーストラリア・英領ソロモン諸島・ニューギニア・インドネシア (1931-33年)、ラップランド (1934年)、フランス領インドシナ半島 (ベトナム・ラオス・カンボジア)・タイ・ミャンマー・マレーシア (1936-38年)、北アフリカ (1950-51年) (大林 1968 : 2)。彼は旅行の経験を随筆で発表し、さらにフリーランスの科学者としてドイツとスイスの民族博物館から収蔵物の収集を引き受けていた。1930年から、正式にウィーン大学で民族学・人類学・地理学を学び1932年に博士号を取った。1939年からグラーツ大学地理学研究所に就任し、1939年に中国雲南地方で調査をしていたが、ドイツ軍のポーランド侵攻により調査を切り上げて帰国した。戦時中は、空軍に召集され、アフリカに関するハンドブックの出版に協力した。戦後は、同僚からナチスに協力した研究者とみなされて冷遇されたが、タイの採取狩猟民の民族誌は古典的な研究であり、かつ卓越した写真技術による貴重な民族写真家として高く評価されている (Florjan 2005)。ベルナチックも、岡と同時代にウィーン大学に学んでおり、1936年から37年にかけてタイ北部を調査している。岡は、彼がニューギニアの調査をしていることも知っていたので、この文章では「ニューギニア及びタイ北部の調査隊」と記したのであろう。

次にフェーラー・ハイメンドルフ (Cristoph von Fürer-Haimendorf, 1909-1995) である。彼は、戦後、日本人研究者とも交流があり、飯島茂による評伝も書かれている (飯島 1972)。彼は、ウィーン大学で民族学を学び、1931年に博士号を取得している。1935年から36年にかけてロックフェラー財団の奨学金で、イギリスに留学した。その時、駐英オーストリア大使館で知り合った人から、親せきのインド総督を紹介してもらい、インドのアッサム州を調査するための便宜を図ってもらった。1937年に一度帰国するが、1939年にインドのハイデラバード藩主国での仕事に就い

た。オーストリアがドイツに併合され、彼はドイツのパスポートを所持していたので、ヨーロッパでの開戦にともない軍事刑務所に2週間収容された。釈放されて自由な行動を極端に制約されたが、1943年には英領インド政府から中央インド・マディヤプラデーシュ州でゴンド族の教育計画に従事する仕事を求められ、さらに1944年にはアッサム州のNEFA (North-East Frontier Agency) の専門官 (Special Officer and Assistant Political Officer) として就任し、この地域を2年間にわたって深くフィールドワークすることができた。1949年にロンドン大学に移り、1951年になって School of Oriental & African Studies に文化人類学科が創設された時、初代教授に就任した (飯島 1972: 120-124)。岡が「ビルマ・アッサム調査隊 (インドにて捕虜)」と記したのは、1937年までのアッサム調査を指しており、その後インドで捕虜となったことなど正確な情報である。

最後に、「シュウエヴェスタ」はシュエベスタ (Paul Joachim Schebesta, 1887-1967) である。シュミットの高弟として同じ神言会の神父として1912年から16年までモザンビークで宣教をしながら地元の歴史を研究し、1920年からアントロポス研究所でシュミットの元で民族学を学び、1924年からマレーシアのネグリートを調査し、1926年にはウィーン大学で民族学の博士号を取得している。1929年から30年と1934年から35年にかけてベルギー領コンゴのイツリーの森でバンプティ族の調査をおこない、1938年から39年にかけてフィリピンのアエタ族やマラッカのセマン族とセノイ族の調査をおこなった。1949年から50年、および1954年から55年にかけて、再びコンゴのイツリーの森で調査をおこなっている (Dupré 1963: IX)。彼は、それぞれの調査地ですぐれた民族誌を発表している。岡が1938年から39年にかけての海外調査に、シュベスタのコンゴ調査を含めているが、彼の記録では、この時期フィリピンのアエタ族を調査している (Dupré 1968: 538)。この資料集に収録された岡の「民族学要説」には、さらに詳しくシュベスタがイタリア領コンゴの調査に行き帰ってきたという記述があり、他の民族学者と同様に、必ずしも海外調査を1938年から39年にかけて実施された調査でない場合もあるので、この場合も1934年から35年にかけてのコンゴ調査を指している。それにしても、シュベスタの調査はシュミットが主宰するアントロポス研究所、そしてカトリック宣教組織からの支援で実施されたのであり、政府とは無関係である。

以上の5人のうち、人物が確定できないニグマイヤー以外は、岡が直接ウィーン大学で面識のある研究者で、いわば旧友の動向を紹介したにすぎない。岡は「調査隊」と紹介しているけれども、基本的に彼らは単独の調査であって、ナチス政権とは無関係である。それに対して、チベット、中南米調査はナチス・ドイツ政権下で組織された遠征隊なので、次に述べる。

4. ナチス政権下のアーネンエルベ

岡は、チベット調査隊を「SS所属の学者を以って組織」と注釈をつけている。これは、ナチス政権下で組織された大規模な研究所のプロジェクトとして派遣された遠征隊を指している。アーネンエルベ (Ahnenerbe) は、ナチス党内におかれた親衛隊 (略してSS) のシンクタンクとして組織された。この組織は、アーリア人の優越性を「科学的」に証明するために、社会科学、自然科学のさまざまな分野の研究部門を擁し、社会科学では、ドイツ文化、言語、信仰、歴史法学のほか、ドイツ民族研究及び民族学、民話、伝説及び神話、遺跡研究、古代史、中央アジア及び探検などの部門を擁していた。

アーネンエルベは、ドイツ軍がポーランド侵攻により第二次世界大戦が勃発する以前、世界各地

に遠征隊を派遣するなど学術的研究に従事していた。しかし戦争勃発後は、美術品を戦利品として略奪するための鑑定の仕事に従事したり、形質人類学的に人種識別ができるとの前提の下で、アウシュビッツ収容所のユダヤ人を生前に写真撮影し、殺害後はその人骨を標本として収集したりしたので、ニュルンベルク裁判では研究所を犯罪組織と認定した。研究内容も、占星術などカルト研究の部門があったので、研究所全体が「疑似科学」の犯罪集団と認定された (Mahsarski nd : 37,46)。

アーネンエルベについては、ミシェル・カーターの先駆的業績があり (Kater 1974)、Dirk Mahsarski の論文がある。前者は博士論文を基礎に、アーネンエルベの生存者からインタビューをしたものも交えた、この分野のもっとも基本的な文献であるが、本稿では、主として後者の Mahsarski 論文に依拠しながらアーネンエルベと民族学、そして遠征隊の組織について解説しておきたい。

親衛隊 (SS) はヒットラー総統を護衛するため 1925 年に組織され、ハインリッヒ・ヒムラーがその全国指導者として就任し、党内の警察組織として勢力を拡大した。ヒットラーは、ドイツ人の歴史的使命を強調していたにもかかわらず、ゲルマン民族の過去には興味を示さず、アーネンエルベの組織と運営は、ヒムラーが主導した。ヒムラーは 1929 年に SS の指導者に就任した後、SS 入隊希望者の人種を判定するため、1931 年に親衛隊人種及び移住本部 (略称 RuSHA) を設置し、同時に SS 隊員を思想教育するため古代史博物館の見学などを企画した (Mahsarski nd : 5)。ヒムラーは、1935 年にベルリンの親衛隊本部で民族学の専門家を交えて会談し、「ドイツ先祖遺産、古代知識の歴史と研究協議会 (Deutsches Ahnenerbe - Studiengesellschaft für Geistesurgeschichte)」を発足することに合意し、ヘルマン・ヴィルト (Herman Wirth, 1885-1981) を所長に任命した。1937 年にこの機関の名称を「アーネンエルベ」と短くした。この年にミュンヘン大学学部長でインド研究者であったヴァルター・ヴュスト (Walther Wüst, 1901-1993) が長官となってから、学術的な研究に力を入れるようになり、世界各地に遠征隊を送った。

その学術探検が、やはり「疑似科学」に基づくと言われるのは、例えば古代ゲルマンとの共通点を探すため、作家のエドモンド・キッス (Edmund Kiss, 1886-1960) に数千年前の北方民族の植民地を探す名目でボリビア遠征を支援した。もっともこの遠征隊も、ドイツ軍のポーランド侵攻が始まり、中止されている (Mahsarski nd : 26)⁶⁾。岡が「クリックベルクの中米調査隊」と記しているのは、この調査隊と思われるが、クリックベルクがいかなる人物かは同定できない。

「疑似科学」から学術的な遠征に転換したのが、チベット調査であった。この遠征隊は、アーネスト・シェーファー (Ernst Schäfer, 1910-1992) が隊長となり、アーリア人とチベット人の人種的近似性の証明など、ナチスのイデオロギーを実証するよう期待されて、ヒムラーの支援によりチベット遠征隊が送られた。近年、シェーファーのチベット遠征は、アーネンエルベの代表的な学術探検として注目されている。シェーファーは 1910 年にケルンで生まれ、ゲッチングで動物学と地理学を学んだ。1930 年にブルック・ドーラン (Brook Dolan, 1908-1945) という資産家のアメリカ人に勧誘されて、彼が組織する動物学の遠征隊に参加し西部中国とチベットの遠征に赴いた。1933 年にゲッチング市長がドイツ人青少年に SS への入隊を呼びかけ、シェーファーはそれに応じた。当時、40 歳以下の 70% の生物学者はナチ党に加入しており、中産階級ドイツ人のエリートとして一般的だった。シェーファーは、1934 年から 36 年まで、再度ブルック・ドーランの組織した東部チベットと中国遠征隊に参加した。アメリカの遠征隊でチベット調査の実績を積んだので、ドイツ政府から帰還を要請されて帰国した。彼は 1935 年にヒムラーと面会し、アーネンエルベの遠征隊としてシェーファーを隊長とするチベット遠征隊が組織された。ヒムラーは、アーリア

人の祖先として内陸アジアとの関連を「科学的に」証明することを望み、シェーファーの遠征隊に形質人類学者を参加させ、チベット人とアリア系民族の形質人類学的類似性を証明させようとした（Engelhardt 2004：57-69）。シェーファーのチベット遠征は、1938年から39年にかけて実施され、SSの組織した学術調査隊ということで、戦後しばらく等閑視された。遠征で撮影した17,000枚に及ぶネガフィルムがコブレンツにある連邦文書館に保管され（Engelhardt 2007）、また宣伝のため調査風景を撮影した映画なども残されている⁷⁾。シェーファーは、SSの隊員であったことから、戦後は戦争犯罪者として裁かれ、しばらく研究職から追放されたので、彼のチベット遠征も長らく学術的評価はされなかった。しかし、近年、写真コレクションを通じて再評価されている。またナチスとチベットというテーマからも、ノンフィクション作品の題材となり、基本的な資料を駆使した優れた研究もでてきている（Pringle 2006, Hale 2003）。

アーネンエルベは、1937年にインド研究者のヴェストが所長に就任して、ナチスがポーランド侵攻を始める1939年まで、学術遠征隊を派遣している。これが、岡の紹介で、「欧羅巴共栄圏」に属していない地域への遠征隊であるとして、「独乙科学の根本性と独乙民族政策の企画性とは羨ましいほどに併行している」と評価している。現在の時点では、そのドイツ民族政策が「疑似科学」といわれる論拠のないアリア人とのつながりを想定したものにすぎない。

アーネンエルベの研究は、ナチスのマスタープランという東方進出の基礎理論に位置づけられ、民族学や民俗学よりも、考古学に重点をおいて、アリア人の移動ルートをさかのぼり、古代アリア人と中東の遺跡発掘物との類似性を求められた。そこでこの時期、ドイツ人考古学者は東欧・南欧・中東発掘資金の大半をアーネンエルベから受けており、特に考古学発掘はヒムラーも強い関心を持っていたので、彼自身も現地視察を行っていた⁸⁾。

さて岡は、はたしてアーネンエルベの研究組織を日本の民族研究所の参考にしたであろうか。後述する民族研究所設置のための参考資料として添付されたドイツの民族学関連の開講科目と研究所の一覧表には、同研究組織が出ていない。これにかかわったヴァルター・ドーナト（Walter Donat, 1898-1970）が、後述する日独文化協会の責任者として、1943年まで東京に滞在していたことを勘案するならば（Epstein 1960：90）、岡が同組織にたいして情報がなかったとは思われない。岡が意図的に言及しなかったかどうかは、疑問が残る。

5. ウィーン大学日本学研究所時代

岡にとってウィーン大学滞在中に影響を受けた重要な人物は、指導教授のシュミット（Schmidt, Wilhelm, 1868-1954）と同時に、三井高陽（1900-1983）である。三井は、三井財閥の当主で、1930年代に「東欧」と日本との文化交流史で重要な役割を演じた人物である。三井にとって「東欧」とは、「ソ連と国境を接するヨーロッパ諸国」であり、彼は文化事業を「三井の金による国策遂行」と考え、ソ連周辺諸国の親日化を企図したものだ（近藤 1998：40-41）。三井の文化事業は、東欧諸国の大学に日本語図書の寄贈、日本語講座の開設、日本研究の振興のための寄付をしており、ウィーン大学日本学研究所の設立もその一環だった。

岡の年譜によると、三井との最初の接点は、1937年7月に日本民族学会調査隊として馬場脩（1892-1979）と共同で実施した北千島占守島の先史的発掘に資金を援助してもらったことだった。岡は、翌年コペンハーゲンで開催された第2回国際人類学民族学会議に、日本民族学会、日本人類学会代表として出席し、占守島発掘の報告をしており、1934年7月ロンドン開催の第1回国際人類学民族学会議に続いて国際的な発表を続け、研究者としての地位を確立している。

外交史料館に保管された1936年5月6日の三井から外務省文化事業部長の岡田兼一宛の書簡によると⁹⁾、シュミットがウィーン大学の日本学研究所所長に岡を推薦したことを記している。そして同年12月13日在オーストリア公使館の谷正之(1889-1962)から外務省文化事業部の柳沢課長宛の文書によると、岡はこの申し出を快諾し、日本に一時帰国した際に日本文化の蔵書購入を依頼したとある。この文書では、「維納が由来「ドナウ」流域諸国の文化の中心たる事及最近欧州政局の変化に伴い此の方面も漸く重きを為すに至れる事情にも鑑み当地に日本文化紹介の機関の設置する事の時宜に適するは詳説を要せざる」とあり、ウィーンが東欧への日本の広報活動の中心地であると同時に、情報収集の拠点になることを期待していた。同日の公電によると、1936年10月27日に日本公館はシュミットと面会し、日本側がウィーン大学に日本文化協会を設立し、場所、書籍、それを運営する人件費と物件費を提供し、ウィーン大学側は岡を最初の所長に希望している意向を伝えている。

岡は、シュミットの推薦で日本学研究所の所長として赴任することになった。外務省文書の中には、1938年8月25日の文書で、岡の所長(Direktor)という名称は、日本学研究所が大学の外部機関であるので不相当だとして、学内に設置を希望して認められた。しかしウィーン大学の官制上、日本学研究所が独立の教室として設置されることが困難なので、民族学教室の一特殊部門として主任であるコッパース教授が研究所を行政的に管掌し、岡は主事(Leiter)とするように変更された¹⁰⁾。クライナーが調べたウィーン大学の資料によると、文学部に岡を日本語講師として認めるよう申請して認可され、日本学研究所が休止して、その図書を民族学博物館図書館に委託したという。この時期、ドイツ政府の圧力があり、三井が寄贈した日本学研究所をベルリンへ引っ張ろうとしたので、岡と三井がウィーンにとどめるよう努力したという(クライナー 1979:469-470)。

岡が日本学研究所で開講した授業の内容は「日本の民族学、先史学、日本語の歴史及び日本の神話と宗教」(クライナー 1979)であった。1939年4月よりハンガリーのブダペスト大学の客員教授に招かれ、隔週でウィーンからブダペストに講義に通い、5月にはシェケット大学でも講義をしている。その間、バルカン半島を旅行している。

岡は1940年11月より1学期間休暇をとって帰国し、後述するように民族研究所設立の運動を開始した。1941年6月に、岡は独ソ戦が始まり再赴任できないことを理由に研究所長を辞職している。岡の年譜を見る限り、東欧での情報活動を通じて、民族研究所の設立に関心を持ち、一時帰国した時は、ウィーン大学の職を留任したまま日本で計画している民族研究所の兼任を考えたのではないと思われる。

岡のこうした行動は、当然三井の耳にも入っていただろう。さらに岡の後任をウィーンの公館が三井に無断で決めたことに激怒し、同研究所向けの資金援助を停止してしまった(近藤 1998:55)。外交史料館文書では、岡の後任を三井と相談して決めたようになっているが、1941年10月6日付の三井から岡宛の文書によると、三井の寄付金のうち、岡が日本に帰国していた1940年10月から1941年4月までの給料を返還するよう求め、かつ5年間寄付をする計画であったのを、3年で打ち切ると通告している。1942年4月13日付の三井から外務省坂本欧亜局長宛の文書によると、岡でなければ達成できないと思っていた事業にもかかわらず、突然現地公使館がウィーン大学日本学研究所の所長を、三井の了解なく村田豊文(1903-1997)に任命し、その任命者であるドイツ大使館文化部の経費で運営すると表明したことに遺憾を表明し、寄付を打ち切っている。では、三井が考えた岡でなければ達成できない国策的文化事業とは何だったのだろうか。これを解く鍵は岡がブダペスト大学で講義した時に訪れた中欧・バルカン半島の調査旅行である。

6. 中欧・バルカン半島研究とインテリジェンス

岡は、1938年から40年までブダペスト大学の客員教員としてウィーンからブダペストまで隔週で通った。このとき、講義の合間にバルカン半島を旅行して、言葉も文化も異なる民族が隣接して居住する社会では、未開社会と同じような民族紛争の問題があり、生きている民族の実態を把握する必要があると思うようになった。しかし、その疑問を解くためにはウィーン学派では限界があるので、彼が学んだ歴史民族学の方法論に疑問を抱くようになった。つまりバルカン半島で起きている民族生成の現象をウィーン学派の文化史説では捉えきれず、徐々に「エトノス」を対象とする民族学の構想をもったのである（岡 1963：346、岡 1981：678）。

では、どうしてウィーン大学の日本学研究所にいた岡が、ブダペスト大学の客員教授になったのであろうか。そこに三井が深く関与している。三井は1935年にハンガリー文部省と個人的な契約を結び、5年にわたり年額1万ペンゲー、日洪協会に年額5,000ペンゲーを日本文化普及のために寄付する約束をした。これにより5年間に3人のハンガリー人を日本に派遣することが可能になった。ハンガリーへの研究資金の提供には、明白な公使館付武官の関与が認められるという。特に日清・日露戦争後の東欧諸国の対日観がロシアを倒した強国日本を尊敬の念で見えており、「ツラン系と分類されたウラル・アルタイ系の諸民族を自覚的な民族統一体へと統合しようとした運動」としてのツラニズムが、戦間期に最も盛んだったのがハンガリーであったからだ（近藤 1998：42-43）。

日本外務省の対外文化事業は、義和団事変の賠償金を積み立てた基金で発足した「対支文化事業部」に始まり、1935年に第3課を新設して国際部化事業に手を広げた。1937年7月にハンガリーは日本に対して文化協定の締結を申し込んだ。当初、日本外務省は消極的だったが、ハンガリーをソ連情報交換に役立てることを進言したウィーン駐在の谷正之公使からの来電で、積極的方針に転換し、日洪文化協定を成立させた（百瀬 1981：36、43）。岡がブダペスト大学で講義したのは、この協定に基づく日本文化論であった。

ハンガリーでは、外務省文化事業部の働きで日洪文化協会が1938年5月20日に設立され、外務省の囑託である岡十一郎の著作を出版したり、ハンガリーへ図書を送りつたりした。この協会がおこなったハンガリー国内で最も重要な活動が学習会で、1940年5月3日の第1回ハンガリー研究会は岡が講師を務めた「ハンガリー事情」だった。この講演で、岡は文化協定、文化交流の高度な政治的利用を主張している（近藤 1998：50-51¹¹）。岡のこうした問題意識は、単に時代の流れではなく、バルカン半島各地で起きている民族運動、ナショナリズムと、その意識を支える民族学、人類学、考古学、神話学などが背景にある。

はたして岡は単にハンガリーの旅行だけで、このような問題意識が生まれたのであろうか。1941年に岡は、当時ジャパントイムズの前社長で代議士だった芦田均と「バルカンの内幕」というテーマで対談している。このときに、岡はバルカン半島での活動の片鱗として、1940年に大学で民族学の講義をしながら、中欧・バルカン諸国をめぐり、研究者と交流していたと語っている。

ハンガリーでは、日本の勃興に影響を受けて、アジアの復興を民族理念としている団体があった。ハンガリーの「ナチ運動」は「国家社会主義ハンガリー党」（Nemzetiszocialista Hungarista movement, NSZMP, HM）を組織しており、その指導者は元参謀少佐のサラシ（Szálasi Ferenc, 1897-1946）だった。岡がハンガリーを訪れた時期、彼は反政府活動で逮捕されていた¹²。岡は、その運動を継承しているドクター・フーバイ（Kálmán Hubay, 1902-1946）と付き合い合ったと言って

いる¹³⁾。フーバイは、ジャーナリストなど様々な職業を経て「国家社会主義ハンガリー党」に参画し、サラシが逮捕された後、1938年から39年の間、サラシの後継者として党の代表をしていた（Vago 2007：491）。岡はフーバイと数回面談して日本とハンガリーの民族的なつながりについて議論している。また当時のハンガリーでは、ナチ運動が農民と学生層、インテリ層に勢力を持っていて、大学生と農村青年への指導理念としていた「ツルル」（=ツラン）はアジア主義を標榜していた。ハンガリーの建国神話として、第一王朝のアルパート王がカルパティアの山を越えたとき、鳥がアルパート王と疲弊した軍隊をハンガリー平原へ導き国を作ったとある。その神話がハンガリーの象徴にもなり、さらにはツラン民族運動にもつながっていた（芦田・岡 1941：289）。

ハンガリーの考古学者フェーヘル（Géza Fehér, 1890-1955）は、ブルガリアで初期ブルガリア王朝の遺物を発掘し、岩壁に描いてある絵を発見した。そしてブルガリアの過去にアジア的なものを再発見する風潮が盛んになっていた¹⁴⁾。岡は、日本の参謀本部がブルガリア最古の武器や軍事組織にも興味を持っていると述べている。同時に、「アジア主義的気運は、之を過大視する事は非常に危ない」と留保しながらも、親日的気運の育成に利用できるツラン運動を肯定的にと捉えている。そして現地での親露、親独、親日の感情が矛盾なく共存している現状を述べている。その上で、ブルガリア人が乃木将軍の言葉を好み、第一次世界大戦後にブルガリアへ連合軍武器接収に行った日本軍が好意を持たれていること、さらには蜂谷公使がブルガリア人の園芸好きという性格に踏まえて桜の植樹をおこなうことで、親日感情の醸成に成功した例をあげている（芦田・岡 1941：290-291）。

また岡は、ハンガリーの歴史に触れて、10世紀に建国して以来、ゲルマン民族とスラブ民族の間で1000年も国を存立した政治的自信が相当強く、14世紀からハンガリーはトルコに支配されたが、19世紀トルコが後退した後に南スラブ族の統一運動が起きて、ハンガリーを建国する政治的意思が働いたのは新しい話だと指摘している（芦田・岡 1941：296）。特に重要なのは、ハンガリーが内閣直属の民族研究所を創立し、失地回復運動の基本研究を熱心に行い、国民に対し地理教育を徹底したことを高く評価している（芦田・岡 1941：298）。岡は戦後の回想でも、バルカンの政治問題にいつも少数民族問題が絡むので、ハンガリー政府が民族研究所に学者を集めて研究していたことに関心を持ったと述べている（岡 1981：679）。

さらに岡は、バルカン問題に関心を持つことで、徐々に「生きている民族というものをとらえなければならぬというのが、私の学問の変わり目です」（岡 1981：678）と述べているように、ウィーンの文化史学派から、関心が離れていった。岡は芦田との対談から、バルカン半島の民族紛争を理解するために、ハンガリーやバルカン半島の民族運動家、考古学者、民族学者と交流したことで、関心が変化していった。岡が単に旅行してまわるだけでなく、旅行先で様々な民族運動家や研究者と意見を交換し、建国神話がどのように民族運動に機能しているのか、また歴史的要因が民族の団結力や、民族意識の構築にどのような作用をしているのかという問題を、民族学の知識を用いて情報を収集していることがわかる。

1942年10月8日に、岡は民族学研究会¹⁵⁾で「現代民族学の諸問題」を講演し、民族学の諸学派が取り扱う研究対象以外に、広大な「民族研究」の領域があることを指摘している。ここで文字を持たない民族の文化に研究を限定している民族学を批判し、「現在の民族学」として、歴史的研究とともに、「民族政策、民族統治、民族運動」の研究も民族学の範囲に含めるべきだと主張した。そして統治対象とする民族の現実的性格と構造を明確にし、民族政策を基礎づけねばならないと結論付けている（岡 1943：122）。

この主張は、ハンガリーでの岡の活動が国際情勢の情報工作という、いわばインテリジェンスの

仕事であったと考えるならば納得できる。さらに三井がいう「岡でなければできない事業」とは、民族学の知識を生かした情報収集の仕事であったことが分かる¹⁶⁾。

7. 日独文化協議会

岡の対談の端々から、ドイツ大使館や参謀本部との接触がうかがわれる。外交史料館の公文書の中に、岡について言及があるのは、1940年7月17日付在ドイツ大使館の神田書記官から出された外務省文化事業部市川第三課長宛の文書である。これによると岡がベルリンにある日独文化協議会の日本側委員として毎年冬に開催される日独学徒大会に尽力したとある。

日独文化協議会は、1938年11月に締結された日独文化協定に基づいて1939年6月に組織された¹⁷⁾。またこの時期のベルリン駐在大使館の動きが岡の活動を理解する上で重要である。1936年11月の日独防共協定締結にともない、ドイツと日本は相互に接近し、ベルリン駐在大使館のなかで、大使と駐在武官の間に力関係の逆転が生じた。つまり、当時の駐独大使武者小路公共(1882-1962)の頭越しに、駐在武官大島浩(1886-1975)が「抜け駆ける接近政策」をおこない、1937年5月に大島と防諜局カナーリスの間にて「『ソ』連邦に関する日独情報交換附属協定」と「対『ソ』謀略工作に関する日独附属協定」の秘密協定を調印した。その後、1937年末に東郷茂徳(1882-1950)が新たな駐独大使に任命され、駐在武官の独走に歯止めをかけようとしたが、逆にドイツ及び東京の参謀本部が東郷を解任して大島を大使に就任させ、その下で日独伊三国軍事同盟の締結が進められた。また大島は、日独軍による(a)情報交換、(b)諜報謀略活動、(c)毎年の定期協議で協力を約した軍事協定を締結した(田嶋 1995: 408-411)。

岡が、ベルリン駐在大使館に日独文化協議会の日本側委員として関係を持っていた時、親独派軍人の大島浩が大使に任命され、情報工作に力を入れていた時期であった。岡はベルリン駐在大使館が、アラビアのことに興味を持っていたので、アラビアについても報告書を書いたと言っている。具体的には、オッペンハイマーの著作では、アラビアについての氏族組織が固有名詞を使って詳細に書いてあるので、アラビア政治の理解に役立つと思ってこの本を要約したという(岡 1981: 679)。そこで、その報告書を外交史料館で探したが、見つけることはできなかった。アラビア研究の分野で「オッペンハイマー」と言えば、マックス・フォン・オッペンハイマー(Max von Oppenheim, 1860-1946)ではないかと考えられる。彼は、ケルンの裕福なユダヤ系実業家の息子として生まれ、アラビア文化やベトウインの生活に関心を持ってアラビア語を学んで研究をしたオリエンタリストで、外務省の随員として1896年からエジプトのカイロに駐在した。第一次世界大戦中は「皇帝のスパイ」とも言われ、イギリスのT.E. ロレンス(Thomas Edward Lawrence 1888-1935)と並んで、中東の専門家として重要な役割を果たした人物である。彼はオリエンタリストとしての知識を生かし、反イギリス・フランスの宣伝、およびバグダート鉄道の建設を進めるため、ドイツの影響力を中東で高める活動をおこなった¹⁸⁾。

オッペンハイマーは、考古学の調査と称してバグダート鉄道の予定地調査で中東を広く旅行して歩いていた。シリア北東部のテル・ハルフで、オッペンハイマーは遺跡を見つけ、1911年から13年にかけて発掘をおこない、1929年にも再度発掘調査をおこなった。岡の言及した報告書は、「テル・ハルフ」の名前を表題にし、副題に「古代メソポタミアに於ける新たな文化」とある本ではないかと考えられる(Max von Oppenheim 1931)。この本の前半では、1899年の旅行で、オッペンハイマーがテル・ハルフに至るまでの旅程で見聞したベトウイン有力者の固有名詞、地域の勢力圏などを詳細に記録している。オッペンハイマーは、正式に考古学・民族学の教育を受けておら

ず、外交の情報機関員として働き、考古学者としてはアマチュアにすぎなかった。しかし彼の旅行見聞記録は、現地の政治的状況、有力者の社会背景、地域事情が詳細に観察されており、情報員として現地の政治と社会を分析する視点で書かれている。また、1914年以降、ベルリンの情報機関設立にも貢献しており（Gossman 2013：84）、ナチス政権下では、ユダヤ人実業家の出身でありながらも、母がドイツ人であったため、迫害を免れ中東の専門家として生きながらえることができた。

岡がオープンハイマーの情報機関員の役割を理解して、彼の著作に着目したのかは不明であるが、その著作の中に、日本の外務省が必要とする中東の地域事情を読み取ることができたのであろう。

また岡は、戦後の回想で日独文化協議会に触れていて、ドイツに留学した日本人に本を与えて報告書を書いてもらおうとしたという。さらに、外務省の調査費で民族の専門家をドイツに派遣する提言もして、審議官や代議士が共鳴して活動してくれたことを語っている（岡 1981：679）¹⁹⁾。

岡のウィーン大学日本学研究所での活動は、東欧から中近東までの民族問題に及び、ドイツ在住の日本人留学生を民族問題に関する研究と翻訳の組織者であったことを示唆している。ウィーン大学での学位取得から岡の関心が大きく変わるのは、第2回のウィーン滞在で、バルカン半島の研究時代である。この時期の関心は、民族学で得た知識を、いかに紛争地域のインテリジェンス活動に役立てるかであり、それが「時代の要請」にかなうものだというのを、ベルリンの日本大使館での交流から理解していったのであろう。

8. 民族研究所の組織

1940年に、岡は5月にバルカン半島、トルコ、9月にイタリア、ギリシャ、トルコ、バルカン半島を旅行して、11月より1学期間休暇をとって帰国している。岡は長くウィーンに留学していたので、日本の人類学・民族学の学会関係者との人脈は限られていたことから、日本の民族学会の中心人物である古野清人に協力を仰ぎ、最初は2人で民族研究所の設立運動をおこなった。その後、小山栄三、八幡一郎、江上波夫、岩村忍、小林高四郎らも加わり、設立運動を展開した。

1940年の秋頃、岡と古野清人は白鳥庫吉を訪問している。当時の首相だった近衛文麿が白鳥の教え子だったので、白鳥の関係からも民族研究所の設立運動の陳情を依頼したのだという（白鳥 1983：5）。民族研究所の設立運動は、政府とのパイプを総動員しておこなわれた。こうした活動が実を結び、1941年6月に閣議で文部省直轄機関として民族研究所を設置することに決定した。しかし、独ソ戦の勃発により近衛内閣が総辞職したため、設立は無期延期となった²⁰⁾。

その後、1942年5月に、大東亜建設審議会により、民族研究所の設置と大東亜共栄圏に在住する108民族の調査を骨子とした文教政策答申を受けた文部省は、ただちに設立準備委員と幹事を任命した。同年7月に民族研究所を文部省直轄の研究所として開設することを決定し、準備委員会が設置された。

1943年1月16日の勅令により民族研究所が設置され、東京市赤坂区霊南坂12番に研究所施設が決められた²¹⁾。18日には文部省から民族研究所の管制が発表された²²⁾。民族研究所官制第1条には、「民族研究所ハ文部大臣ノ管理ニ属シ民族政策ニ寄与スル為諸民族ニ関スル調査研究ヲ行フ」と規定される。その設立理由は「大東亜戦争ヲ遂行シ大東亜建設ヲ完遂スル為国策遂行ニ関連アル諸民族ニ関スル基本的総合的調査研究を掌ル機関ヲ設置スル緊急ノ必要アルニ依ル」としている。そして事業内容は、大東亜共栄圏とその周辺地域の「民族工作ニ連関スル民族誌的、民族史的、民

族政策的調査研究」(傍点筆者)を現地調査でおこなうとしている²³⁾。公文書には、完成年度の組織全体を示す人員配置図があり、所員 65 名、助手 65 名の巨大な組織になる計画だった。

それを裏付ける資料として「昭和 17 年度概算要求書参照書」と題されたタイプ印刷の小冊子がある。これには、「東亜諸民族調査項目概要」と、「独乙ニ於ケル民族研究ノ施設」が収録されている²⁴⁾。後者だけで、全 78 頁におよぶ書類である。これは、最初の 8 頁でドイツの異民族研究を扱う「民族研究」の傾向を、比較民族学・比較言語学・政治史・ドイツ学・人種学・伝道学²⁵⁾の 6 系統に大別して紹介している。それに続いて 1940 年のドイツにおける各大学の言語・歴史・民族に関する海外事情を講義する講座名と担当教員の名前、および大学附設の研究所・博物館の名称と研究者の名前を網羅した資料が添付されている。これは文部省へ民族研究所設置のために参考資料として提出されたものと思われる。同盟国ドイツの民俗学および民族研究の事情を持ち出すのは、岡の構想と一致している。

9. 「民族研究講座」

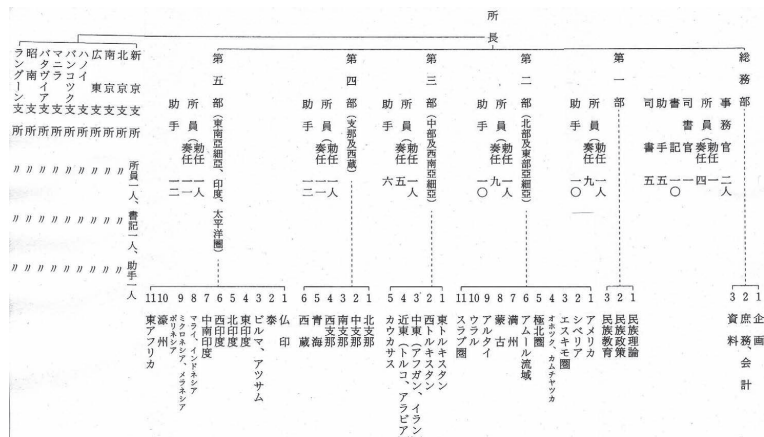
「民族研究講座」は、民族研究所と民族学協会の共同主宰で、その日程・演題・講師・所属は表 1 に示しておいた。これは一般向けの公開講座で、新聞広告により宣伝し、全体の 3 分の 2 以上の講座に出席すると修了書を出していた。第 1 期の場合、第 1 回は概説、第 2 回は民族問題及民族政策、第 3 回は支那及印度民族学、第 4 回は欧米民族学、第 5 回は北亜・中亜及西亜民族学、第 6 回は南方圏民族学で、その講師陣は民族研究所員を中心に、33 名が世界中の民族を地域ごとに講義している。

しかし当時各機関にいた世界各地の民族問題の専門家を召集して連続講座を開催し、それが盛況だったことは、時代の雰囲気窺わせる。この講座が盛会だったので、規模を縮小して大阪と札幌でも「民族研究講座」が開催された。

この「民族研究講座」の講演内容は、筆記され、清書した原稿が民族学振興会に保管されていた。これらは、当時の研究レベルを知る上で貴重な資料である。この表 1 で「欠」となっているものは、講演の原稿が残されていない。当時助手だった鈴木二郎に民族研究所のことをインタビューしたとき、彼は講演会の後、その内容を小さなパンフレットに印刷したと語るが、実物は残っていない。表 1 で欠落している原稿は、パンフレットにするために印刷所にまわしたものとみられる。

今回、この「民族研究講座」の筆記録に注釈をつけて出版できることは、民族研究所の社会的役割、及び戦時中の世界情勢に関する日本の分析レベルを知ることができると言える。講座の構成は、第 1 回の概説では、民族学の学説史がその分野ごとに丹念な紹介があり、第 2 回以降は、地

図 1 完成時の民族研究所の組織



出典：国立公文書館所蔵、「二 民族研究所官制」

表1 「民族研究講座」第1期 一覧

開催回	開催日	講義題目	講師名	※	
第1期第1回 (民族学)	1943年11月	2日	民族学要説	岡正雄(民族研究所員)	欠
		5日	民族理論	小山栄三(民族研究所員)	
		6日	社会民族学	岡田謙(東京高等師範学校教授)	
		9日	宗教民族学	宇野圓空(東京帝国大学教授)	
		10日	言語民族学	泉井久之助(京都帝国大学助教授)	
		12日	技術民族誌学	八幡一郎(民族研究所員)	
		13日	民族主義の問題(特別講演)	高田保馬(民族研究所長)	
第1期第2回 (民族問題及民族政策)	1943年12月	8日	民族秩序論	岡正雄(民族研究所員)	欠
		10日	離婚及同化問題	小山栄三(民族研究所員)	
		11日	北方圏民族問題及民族運動	江上波夫(民族研究所員)	
		14日	中国民族問題及民族運動	田中香苗(毎日新聞社東亜部長)	
		15日	南方圏民族問題及民族運動	大岩誠(東亜経済調査局調査員)	
		17日	民族政策論	高田保馬(民族研究所長)	
		18日	民族と政治(特別講演)	金井章次(民族研究所参与民族学協会顧問)	
第1期第3回 (支那及印度民族学)	1944年1月	15日	支那民族	牧野巽(民族研究所員)	欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠
		18日	西北支那諸民族	岩村忍(民族研究所員)	
		19日	西南支那諸民族	松本信広(慶應義塾大学教授)	
		21日	印度諸民族	岩井大慧(東洋文庫主事)	
		22日	西藏・青海諸民族	渡邊照宏(民族研究所嘱託)	
		25日	アフガニスタン諸民族	蒲生礼一(東京外国語学校教授)	
		26日	大東亜文化(特別講演)	大川周明(法学博士)	
第1期第4回 (欧米民族学)	1944年2月	16日	スラヴ民族	茂木威一(陸軍大学校嘱託)	欠
		18日	アングロサクソン民族	間崎万里(慶應義塾大学教授)	
		19日	ドイツ民族	岡正雄(民族研究所員)	
		22日	ユダヤ民族	岩崎陽山(外務省嘱託)	
		23日	ラテン民族	井沢実(情報局情報官)	
		25日	バルカン諸民族	道正久(公使館一等通訳官)	
		26日	最近の欧洲情勢(特別講演)	山田芳太郎(外務省調査局長)	
第1期第5回 (北亜・中亜及西亜民族学)	1944年3月	15日	北亜・中亜及西亜民族学	江上波夫(民族研究所員)	欠
		17日	中アジア諸民族	岩村忍(民族研究所員)	
		18日	シベリア諸民族	江上波夫(民族研究所員)	
		22日	満洲諸民族	中野清一(民族研究所員)	
		25日	蒙古諸民族	米内山庸夫(外務省嘱託)	
		28日	西アジア諸民族	大久保幸次(回教圏研究所所長)	
		31日	ソ聯戦力の源泉(特別講演)	大蔵公望(東亜研究所副総裁)	
第1期第6回 (南方圏民族学)	1944年4月	14日	南方圏民族学概説	杉浦健一(民族研究所員)	欠
		15日	比島諸民族	八幡一郎(民族研究所員)	
		18日	旧蘭印諸民族	杉浦健一(民族研究所員)	
		19日	ビルマ諸民族	蒲池清(東亜研究所所員)	
		21日	仏印諸民族	山本達郎(東京帝国大学助教授)	
		22日	泰、マライ諸民族	宮原義登(東亜経済調査局)	
		25日	ニュージーランドの情勢(特別講演)	郡司喜一(陸軍司政長官)	

出典：『民族学研究』新第1巻第12号、1943年、71-72頁。『民族学研究』新第2巻第2・3号、1944年、63-64頁。『民族学研究』新第2巻第4・5号、1944年、71-72頁。『民族研究』第3巻第1・2合併号、41頁。および民族学振興会資料。

※「欠」は神奈川県立日本常民文化研究所蔵民族学振興会資料に所蔵がないものを示す。

域ごとの民族の歴史、現状、民族対立、民族運動、植民地の歴史であるが、図1に示した民族研究所の地域区分ごとによる組織編制に、ヨーロッパ事情を加えた構成になっていることがわかる。

この「民族研究講座」で講師を務めたのは、民族研究所の所員を中心に、民族学に関係する大学の教員が含まれるが、興味深いのは、研究者以外の講師である。当時、満鉄の東亜経済調査局調査部主事を務め、国家主義者、右翼の理論家として大アジア主義を唱えていた大川周明や、内蒙古で親日傀儡政権である蒙疆連合自治政府最高顧問の金井章次など、政治的に重要な役割を果たしている人物のほか、外務省、陸軍関係者が講師を務めている。「民族研究講座」の翻刻作業を進めるうえで、著作権の確認とともに、講師の経歴を調査していったが、当時の世界情勢の分析として、単

に学界のみでは計り知れない世界情勢の事情を講演しており、民族研究というよりは、インテリジェンスに近い世界情勢の紹介となっている。個々の事例については、それぞれの講師紹介の項目を参照してほしいが、こうした講師の依頼が、岡個人のネットワークでできたのか、あるいは外務省や参謀本部の協力をどのようにとったのか、新たな疑問がわいてくる。

10. おわりに

岡正雄は、ドイツの「民族研究」が、政治学、現在学的民族学、言語学の三位一体の研究分野であることが、ナチス政権で強力に推し進められていることを紹介した。その構想で、民族研究所は設立され、「民族研究講座」は、民族学にくわえて地政学的な「政治学」で構成されている。国際情勢の分析に役立つインテリジェンスは、国際関係、経済に加えて、考古・民族・歴史も含んだ総合的な「地域研究」であることを、岡は第2回のウィーン滞在で学んだ。清水昭俊は、岡がナチズム隆盛期のオーストリアに滞在したにもかかわらず、ナチズムに染まらず、「文化」と「体質」、「民族」と「人種」の分離という学術的思考の一貫性は保持し、守るべき一線はかろうじて守った、と結論している（清水 2013a : 131）。

ナチス民俗学は、ファシズム政権のイデオロギーを支えてきた。形質人類学者は、ホロコーストに協力した学問として、戦争犯罪にも問われた。つまり一口にナチス民俗学（あるいは民族学）といっても、人種主義によるユダヤ人の迫害から、1942年のヴァンゼー会議による「ユダヤ人問題の最終的解決」でホロコーストを決定し、その後の大量虐殺実施まで、変容を遂げてきた。例えばアーネンベルクの研究機構は、第二次世界大戦の開戦前と後では、その活動が大きく異なる。岡に影響を与えたであろうナチス民俗学と民族学とは、ナチス・イデオロギーの「疑似的仮説」を「科学的」に証明する目的で、学術遠征隊を世界各地に派遣した大戦勃発前の時代であり、シェーファーのチベット調査隊のように、目的はさておき、遠征隊はナチス・イデオロギーとは無関係に学術的な調査を実施していった時期のものである。こうしたナチス民俗学、そして民族学に、岡が当時どこまで信頼を置いていたのかは定かでない。少なくとも岡の恩師シュミットがナチス・ドイツによって亡命を余儀なくされ、ウィーン大学の同級生や恩師がオーストリア併合に伴って甘受した状況を熟知しているので、ナチス政権に完全なシンパシーを持たなかったと言える。

しかし、国際連盟を脱退し、三国軍事同盟の提携先として、ナチス・ドイツが重視されていた時期に、岡は日本に新たな民族学の研究所を創設し、「時局に必要な」民族学の研究に研究者を動員する名目は、政治的説得力があった。それまで民族学を標榜する国立の研究所が皆無の状況から創設までこぎつけた政治力は、岡でなければ成し遂げることができなかつたであろう。それだけに、民族研究所の活動は、戦後、戦争協力の代表として糾弾され、記憶から抹消されてきた。

「民族研究講座」は、そうした戦争状況における情勢分析として、今までにない資料である。冷戦終結後、地域紛争が民族や宗教に起因して起きている状況をかながみると、冷戦以前の民族対立や民族運動の状況には類似性が認められるのではないだろうか。岡が、中欧・バルカン半島に見た民族紛争と民族生成の状況は、ボスニア紛争を見ていると必ずしも過去のものとは言えない。民族紛争、宗教対立など、「民族」をめぐる現在の社会的な社会問題、国際紛争の歴史的経緯を理解するための資料としても役立つのではないかと考えている。

注

- 1) この解説は、すでに民族研究所関係で発表した原稿と一部重複している(中生 1997, 2013)。
- 2) 牧野巽の人と学問をまとめた内藤莞爾(1916-2010)は、民族研究所が「軍事色は皆無であった」と述べている(内藤 1982: 99)。また民族研究所について、蒲生正雄が研究所の設立とラマ廟調査と回民調査について、わずかに触れている(蒲生 1966: 6)。また民族学振興会の歴史で、民族研究所の組織と活動が簡単に触れられている(民族学振興会編 1984a: 22-26)。また末成道男が日本の民族学の経緯をまとめた中に、民族研究所の調査活動と出版物について若干の言及をしている(末成 1996: 11-12)。
- 3) ドイツ語には、民俗学(Volkskunde)と民族学(Völkerkunde または Ethnologie)という区別がある。1980年代にウィーンへ留学した森明子によれば、前者がヨーロッパ社会を、後者がヨーロッパ以外の社会を研究対象とするように分かれていたと指摘している。この区分について、森は人類学が研究対象をあらかじめ限定する考えに納得できなかったとコメントしている(森 2009: 399)。その考え方は、戦前の岡も持っていて、民族学が文字を持たない未開社会の民族を対象とする限定的なものとして「現代的民族学」という概念と唱え、文字を持つ文明社会の民族も、その研究対象とすることを主張した(岡 1943: 119)。本稿ではヨーロッパ社会、とくにドイツを中心とするヨーロッパ社会研究を「民俗学」、ヨーロッパ社会以外を対象にする場合を「民族学」と区別した。
- 4) ナチス・ドイツの民族学は、戦後のニュルンベルク裁判で、ホロコーストに加担した犯罪的な学問と断罪されたが、ドイツではファシズムの勃興に伴い、伝統文化の重視であるとか、祖先遺産の顕彰など、幅広い分野で民俗学は活用された。ナチス民俗学を、ホロコーストだけに限らず、ファシズムからナショナリズムまで広く活用された学問という意味で用いたい。
- 5) ニグマイヤーがパレスチナからコーカサスまで遠征したのは、具体的にドイツ軍との密接な連絡のもとに、ロシア革命の情勢が中央アジアにどのように浸透し、アフガニスタンの反英闘争、コーカサス作戦などの具体的な情報を得るための活動だった(Seidt 2001)。
- 6) このほか、ペルーとコロンビアにも探検隊が送られた(Kater 1974: 97)。
- 7) シェーファーが記録した映画をもとに、アメリカではドキュメンタリーが作成されている。Hitler's Search for the Holy, Channel5 (2013年11月20日放送)。
- 8) アーネンエルベに関連した考古学研究は、次の本にまとめられている(Leube Achim und Hegewisch, Morten 2002)。
- 9) 以下参照したのは、次の文書。「ウィーン大学日本学研究所関係一件」外務省外交史料館・外務省資料・I 門文化、宗教、衛生、労働及社会問題・1 類文化、文化施設、外交史料館所蔵請求番号 I-1-3-0-039。
- 10) この文書には、コッパース教授(Koppers, W., 1886-1961)がカトリック信者に対するナチの政策に反対したので、1938年4月から休職になったとある。クライナーがウィーン大学の内部事情を明らかにしているが、1938年から39年の間に、シュミットがアントロポス研究所とともにスイスのフリブールに亡命し、コッパースは強制的に退職させられてインド調査に出かけ、ハイネ・ゲルデル(Heine-Geldern, Robert, 1885-1968)はアメリカ講演旅行中に、そのまま亡命したとしている(クライナー 1979: 471)。
- 11) 近藤正憲の論文では、この書類が津田塾大学図書館の今岡十一郎文庫で発見したとあるので、津田塾大学図書館で調査をしたが、未整理の状態で現物を確認できなかった。これは「第1回ハンガリー研究会 講演速記」とあるので、手書きの速記録である可能性がある。
- 12) サラーシは1935年に民族主義組織「国民の意思」党(Nemzet Akaratanak Pártja)を創設したが、1937年4月より活動を停止させられた。それにもかかわらず同年にファシスト組織「矢十字党」(Nyilaskeresztes Párt)を設立してその党首となった。岡がブダペストを訪れる前の1938年4月から反政府活動で収監されていたが、1940年8月にヒットラーの圧力で釈放された。1944年10月17日、ドイツが前首相を保護監督下に置き、サラーシが首相に任命された(Patai 1996: 518, 545, 584)。しかしソ連軍の侵攻でハンガリー全土を喪失し、サラーシは戦後、ハンガリー人民裁判によって処刑された(Michman 2007: 402)。
- 13) フーバイについては、人名事典、百科事典などを調べたが、この人物についての情報はなかった。唯一、ハンガリー語の次のサイトに情報があり、内容を英訳して参照したので、参考までに挙げておく。http://hu.wikipedia.org/wiki/Hubay_K%C3%A1lm%C3%A1n, 2014年11月23日アクセス。
- 14) フェーヘルは、ブルガリア古代史で、10世紀から12世紀にブルガリア古代人が定住した時期を研究した。プリスカ(Pliska)とカルゲリツァ(Kallugeritsa)の発掘に参加し、Madara Horsemanとその碑文の調査を専門とした(Dechko 2003: 7)。
- 15) 民族研究所の外廓団体として1942年8月21日に設立された財団法人民族学協会が主催した、第1回の民族学研究会。「民族学協会設立」『民族学研究』新1巻1号、127頁(著者なし 1943)。
- 16) ブダペスト大学では、学生に模した連絡員からドイツと東方の物資輸送についての情報を得て、それをウィー

- ン帰着後にローマの日本大使館に連絡していたといわれる（清水 2013：134）。当時、ブダペスト大学に滞在した留学生は徳永康元であるが、徳永の回想録には、このような話は出てこない。当時のブダペスト大学の状況を勘案するならば、外務省囑託の今岡十一郎（1888-1973）の方が、こうした情報工作に従事していた可能性が高く、「学生に模した連絡員」という情報は留保する必要がある。今岡に関しては、津田塾大学に寄贈された今岡の遺品史料を駆使した伝記がある（梅村 2013）。
- 17) 「日独枢軸更に強化、文化協定いよいよ廿五日調印」『東京朝日新聞』1938年11月17日。「在東京日独文化協議会」『東京朝日新聞』1939年6月18日。神戸大学電子図書館、2014年11月22日閲覧。
- 18) マックス・フォン・オッペンハイマーの記述は、インテリジェンスとしての活動を中心にまとめた伝記に依拠している（Gossman 2013）。
- 19) クライナーによると、岡は日独文化協会の活動を調べて、ナチス思想に対して距離をおいていたこと強調している。例えば、1939年末から翌年にかけての学生の合宿で、「日独の国家概念」というテーマが提案された時、岡は政治的であるとの理由で別のテーマにさせたという（Kriner 2013：244）。
- 20) このとき岡は、ウィーンへの帰任が不可能になったという理由で、ウィーン大学日本学研究所所長、及びブダペスト大学の客員教授を辞任している。そして参謀本部から囑託されて、1942年5月には東南アジアの民族事情を視察している。
- 21) 建物はアメリカ大使館の裏にあり、アメリカの新聞記者の宿舎を敵国財産として没収した建物を使用していた。その建物は戦後まで焼け残っていた。場所としては、霊南坂教会の前で、現在サントリーホールになっている。
- 22) 民族学振興会文書にある民族研究所官制公布を報道した新聞記事は、『朝日新聞』『読売報知新聞』『毎日新聞』『日本産業経済新聞』『東京新聞』の1943年1月18日夕刊、さらに翌19日には『朝日新聞』の社説で取り上げられている。
- 23) 第1 南方諸地域統治ニ直接連関スル現地の民族調査研究（1）ビルマ、マライ、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベス、ニューギニア、フィリピン、メラエシアニ於ケル民族誌的、民族史的、民族政策的調査研究（2）タイ、仏印ニ於ケル民族誌的、民族史的、民族政策的調査研究
第2 支那西北辺疆、西南辺疆、シベリア、印度、濠州ニ於ケル民族工作ニ連関スル民族誌的、民族史的、民族政策的調査研究
第3 中央亜細亞、東アフリカ及マダガスカルニ於ケル民族工作ニ連関スル民族誌的、民族史的、民族政策的調査研究
第4 スラブ民族及アングロサクソン系民族ノ基本的民族政策研究
第5 東亜共栄圏内ノ民族秩序体制ノ研究
第6 東亜共栄圏内ノ民族問題、人口問題及民族配置ノ総合的研究
- 24) 以上の資料は、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する民族学振興会資料にある。
- 25) 果たして「伝道学」が、正式の研究テーマや大学の講座名であったのかは、定かでない。しかし、岡がウィーン大学で師事したシュミットとコッパースは神父であり、カトリック系の大学において海外伝道のために「民族学」が置かれていたことを勘案するならば、伝道学という名称も講座名であったことは考えられる。

参考文献

- 芦田均・岡正雄
1941 「対談バルカンの内幕」『改造』昭和16年5月時局版、pp. 282-303
- 飯島茂
1972 「フューラー・ハイメンドルフ教授の横顔」『季刊人類学』3巻1号、pp. 111-127
- 石田英一郎
1970 『石田英一郎全集』4巻、東京：筑摩書房
- 梅村裕子
2013 「今岡十一郎の活動を通して観る日本・ハンガリー外交関係の変遷」『国際関係論叢書』2巻2号、pp. 159-206
- 岡正雄
1935 「独逸に於ける民俗学的研究」柳田国男編『日本民俗学研究』東京：岩波書店、pp. 327-372
1941 「欧州に於ける民族研究」『改造』昭和16年8月号、pp. 64-66
1943 「現代民族学の諸問題」『民族学研究』新1巻1号、pp. 119-122
1963 「岡正雄教授著作目録」岡正雄教授還暦記念論文編集委員会編『民族学ノート』東京：平凡社、pp. 343-350

- 1981 「岡正雄氏談話」 渋沢敬三伝記編集刊行会編『渋沢敬三』下、東京：渋沢敬三伝記編集刊行会、pp. 664-689
- 岡正雄他
- 1958 『日本民族の起源：対談と討論』東京：平凡社
- 岡正雄教授還暦記念論文集編集委員会編
- 1963 『民族学ノート：岡正雄教授還暦記念論文集』東京：平凡社
- 大林太良
- 1968 「はじめに」ベルナツィーク著、大林太良訳『黄色い葉の精霊：インドシナ山岳民族誌』東京：平凡社、pp. 1-6
- 蒲生正男
- 1966 「社会人類学 日本におけるその成立と展開」日本民族学会編、pp. 27-49
- 1972 (1970) 「岡正雄先生と社会人類学」『民族学からみた日本』東京：河出書房新社、pp. 451-457
- 河野真
- 2005 『ドイツ民俗学とナチズム』東京：創土社
- クライナー J.
- 1979 「岡先生とヴィーン：学説の裏付け」岡正雄『異人その他』言叢社、pp. 453-480
- 近藤正憲
- 1998 「三井高陽の対東欧文化事業：ハンガリーのケースを中心に」『千葉大学社会文化科学研究』2号、pp. 33-63
- 清水昭俊
- 2013a 「異人、現在の民族学、そして種族史的形成：岡正雄と日本民族学の展開」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の戦前と戦後：岡正雄と日本民族学の草分け』東京堂出版、pp. 67-142
- 2013b 「民族学の戦時学術動員・岡正雄と民族研究所、平野義太郎と太平洋協會」『国際常民文化研究叢書4—第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学—』pp. 17-82
- 白鳥芳郎
- 1983 「岡正雄先生追憶の記」『民族学研究』48巻1号、pp. 4-7
- 末成道男
- 1996 「学会・協会・振興会の動向」クライナー J. 編『日本民族学の現在』東京：新曜社、pp. 9-15
- 高田保馬
- 1944 「民族政策の基調」民族研究所編『民族研究所紀要』1冊、東京：彰考書院、pp. 1-18
- 拓植信行
- 1980 「戦争と民俗学の周辺」柳田国男研究会編『柳田国男伝』東京：三一書房、pp. 879-911
- 田嶋信雄
- 1995 「ナチ時代のベルリン駐在日本大使館：人と政策」『成城法学』48巻、pp. 401-421
- 内藤莞爾
- 1982 「牧野巽」『社会人類学年報』Vol.8、pp. 97-113
- 中生勝美
- 1997 「民族研究所の組織と活動：戦争中の日本民族学」『民族学研究』第62巻第1号、pp. 47-65
- 2013 「戦時中の日本民族学：岡正雄の民族研究所」クライナー J. 編『日本民族学の戦前と戦後：岡正雄と日本民族学の草分け』東京：東京堂出版、pp. 143-174
- 百瀬宏
- 1981 「戦間期の日本の対東欧外交に関する覚書」『国際関係学研究（津田塾大学）』no. 8、pp. 27-44
- 森明子
- 2009 「ドイツの民俗学と文化人類学」『国立民族学博物館研究報告』33(3)、pp. 397-420
- 著者なし
- 1943 「民族学協会設立」『民族学研究』新1巻1号、pp. 127-128
- 欧文
- Dechko Lechev
- 2003, *Madara*, Varna: Publishing house "Slavena",
https://archive.org/stream/MadaraNationalArchaeologicalReserve/bulgaria_madara#page/n49/mode/2up
 herausgegeben von Achim Leube ; in Zusammenarbeit mit Morten Hegewisch (2014. 12. 3)

- 2002, *Prähistorie und Nationalsozialismus : die mittel- und osteuropäische Ur- und Frühgeschichtsforschung in den Jahren 1933-1945*, Heidelberg : Synchron
- Dirk Mahsarshki
 nd "The Ahnenerbe of the SS (1935-1945) : the think tank for Germanic supremacy" in http://www.academia.edu/8613964/The_Ahnenerbe_of_the_SS_19351945_A_think_tank_for_Germanic_supremacy (2014. 12. 3)
- Dupré, Wilhelm
 1963, "Vorwort", Festschrift Paul Schebesta zum 75. Geburtstag gewidmet von Mitbrüdern, Freunden und Schülern, *Studia Instituti Anthropos*, v. 18, VII-XI
 1968, "Obituaries : Paul Joachim Schebesta", *American Anthropologist* Vol.70, pp. 537-545.
- Engelhardt, Isrun
 2004, "Tibetan Triangle: German, Tibetan and British Relations in the Context of Ernest Schäfer's Expedition, 1938-1939", *Asiatische Studien/Etudes Asiatiques*, Vol. 58, pp. 57-113
- Engelhardt, Isrun (ed.)
 2007, *Tibet in 1938-1939: Photographs from the Ernst Schäfer Expedition to Tibet*, Serinda Publications
- Epstein, Fritz,T
 1960, "War-time activities of ss-ahnenerbe", Beloff,Max ed., *On the track of tyranny; essays presented by the Wiener Library to Leonard G. Montefiore, O.B.E. on the occasion of his seventieth birthday*, London, Pub. for the Wiener Library by Vallentine, Mitchell, pp. 77-95
- Florian, Stifel
 2005, "Bernatzik, Hugo Adolf, (1897-1953)", *Tribal*, Vol.10 (1), pp. 108-111
- González, Jorge M
 2010, "Ernst Schäfer (1910-1992)- from the Mountains of Tibet to the Northern Cordillera of Venezuela: A Biographical Sketch", *Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia*, Vol.159, pp. 83-96
- Gossman, Lionel
 2013, *The Passion of Max von Oppenheim : Archaeology and Intrigue in the Middle East from Wilhelm II to Hitler*, Open Book Publishers
- Hale, Christopher
 2003, *Himmler's Crusade. The Nazi Expedition to Find the Origins of the Aryan Race*, John Wiley & Sons, Hoboken (NJ)
- Hans-Ulrich Seidt
 1999, "Oskar Ritter von Niedermayer und die deutsche Geostrategie : Ein biographisches Projekt" *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 47 (8), 736-739
 2001, "From Palestine to the Caucasus-Oskar Niedermayer and Germany's Middle Eastern Strategy in 1918", *German Studies Review* Vol.24 no.1, pp. 1-18
 2002, *Berlin, Kabul, Moskau: Oskar Ritter von Niedermayer und Deutschlands Geopolitik*, Munich: Universitas
- Helmut Petri
 1954, *Sterbende Welt in Nordwest-Australien*, Braunschweig, A. Limbach
- Jacques Ivanoff
 2005, "Introduction and Analysis of the Moken Oral Corpus", in Hugo A. Bernatzik, *Moken and Semang, 1936-2004 Persistence and Change*, White Lotus, Bangkok. pp. XV- XLV
- Kreiner, J.
 2013, "Die Gruendung des Instituts fuer Japankunde an der Universitaet Wien. In : Ingrid Getreuer-Kargl und Sepp Linhart ed.: Die Republik Oesterreich und Japan waehrend der Zwischenkriegszeit 1918-1938 (1945)", *Beitraege zur Japanologie* Vol.42, pp. 217-253.
- Leube Achim und Hegewisch, Morten
 2002, *Prähistorie und Nationalsozialismus : die mittel- und osteuropäische Ur- und Frühgeschichtsforschung in den Jahren 1933-1945*, Heidelberg : Synchron
- Macfarlane, Alan, Turin, Mark
 1996, "Obituary: Professor Christoph von Fürer-Haimendorf 1909-1995" *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol.59 no.3, pp. 548-551
- Max von Oppenheim
 1931, *Der Tell Halaf; eine neue kultur im ältesten Mesopotamien*, Leipzig (Tell Halaf: a new culture in oldest

Mesopotamia, London ; New York, G. P. Putnam's sons)

Michael H. Kater

1974, *Das "Ahnenerbe" der SS, 1935-1945; ein Beitrag zur Kulturpolitik des Dritten Reiches*. Stuttgart, Deutsche Verlags-Anstalt

Michman, Jozeph

2007, "Szálasi Ferenc (1897-1946)", in *Encyclopaedia JUSAICA*, Vol.19, pp. 401-402

Patai, Paphael

1996, *The Jews of Hungary: History, Culture, Psychology*, Detroit: Wayne State University Press

Pringle, Heather Anne

2006, *The Master Plan: Himmler's Scholars and the Holocaust*. New York: Hyperion Books

Tauchmann, Kurt

1973, "Widmung", hrsg. von Kurt Tauchmann; Unter Mitarb. von Brigitte Steinfurt u. Margret Stobberg, *Festschrift zum 65. Geburtstag von Helmut Petri*, Köln : Böhlau, pp. XI-XIV

Vago, Bela Adalbert

2007, "Arrow Cross Party", *Encyclopaedia JUSAICA*, Vol.2, p. 491